

「今年度も優秀な論文が揃った」

藤井宏志

兵教大の学部学生、大学院生は、研究について他大学と違った制約条件をもっている。学部学生は、1年から始まる9つの種類の教育実習は4年の時まで続き、これに、優秀な教育養成のための充実した授業時間の多さである。4年になっても月曜から金曜までほとんど空き時間がないほどである。大学院も、現職教員の資質向上を目的に設立されたことから、修士1年の間は、これも月曜から金曜まで時間割はぎっしり詰まっている。従って、学部学生は、論文作成のための研究・調査の日は限られてくる。大学院生の方は、修士2年次の実質9か月（12月20日提出）ということになる。

今回発行するのは第5・6号の合併号である。合併号となったのは、大学の改組があり、2000年春、地理学研究室の教官4名のうち2名が異動することになったことなどが主な理由である。2000年春に卒業、修了した皆さんには多大な御迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

この合併号には両年度合わせて、修士論文3編、卒業論文8編の要約、それに特別に御寄稿いただいた笠木秀樹氏の論文が収録されている。これらの論文を簡要に紹介する。

[卒業論文]

青木敢也「明石台地の地形発達」は、日本でも稀なほど河成、海成段丘群が発達した明石台地は、明石原人発見の地としても知られており、この論考を含め台地の地形発達を体系的にまとめた力作である。荒川文雄「姫路市岡田湧水の地理学的研究」は、姫路平野各地にみられる湧水が姫路市発達に果たした役割を現地調査により初めて論究したものである。中西弘一「金沢市観光発展の研究」は、近年、停滞のみられる伝統的観光地金沢を、実態調査により、若い人も訪れる魅力的な観光手法の事例を指摘し提言を行った意欲的な研究である。

池田宏美「物語作品の想像空間と地理空間の再構成」は梨木香歩『西の魔女が死んだ』をとりあげ、メンタルマップ研究の手法から、作品の想像空間と現実世界の地理空間との対応関係を探究したすぐれて創造的な研究である。栗原由利子「年齢別人口分布からみた兵庫県の地域特性」は各年度国勢調査などを綿密に分析し、兵庫県の人口の特性を明らかにした兵庫県を研究する者は必読の論文である。小越周平「西脇の自然環境」は、織物の町西脇市の都市づくりを、環境面に視点をおき、現地調査により、提言を行ったすぐれた論文である。堀慎一郎「姫路平野南部の地形発達」は広畑平野に何れも並ぶ砂州を現地調査し地形発達を明らかにし、新日鉄広畑工場の立地に

も新しい知見を加えた厚味のある論文である。渡邊亜希子「西アジアの気候変動と文明」は、古代文明の興亡が同時多発的であることに着目し、地球の環境サイクルが影響していることを考究したスケールの大きい、またすぐれて具体的な研究である。

[修士論文]

矢田貝真一「韓国済州島における最終氷期の風成塵堆積とモンスーン変動」は、韓国済州島のポーリング試料を最先端の分析方法で分析し、風成塵起源の無機物堆積量変化から東アジアの気候変動の研究にも大きく寄与し、世界的な気候変動の研究にも貢献大である。山田達夫「観光地化された社会における近代学校教育ーインドネシア・バリ州の事例研究ー」はインドネシア共和国バリ州ウブツ村で何度も現地調査を行い、とくに、現地語で小学生、教師、父母を対象とした意識調査を行い、この分析からバリにおける近代学校教育の現状を研究した力作かつ貴重な論文である。奥村公英「滋賀県地場産業の地理学的研究ー存続理由の考察を中心にしてー」は滋賀県にある9つの地場産業を、現地に数多く訪ね調査し、大量生産の大企業製品、アジア・中国などの低価格製品、従業員の高齢化・後継難などの条件下での存続理由を考察したすぐれた研究である。

[寄稿論文]

笠木秀樹「グリーン・ツーリズムの展開ーバイエルン州を中心としてー」、論者は何度もドイツに滞在し、ドイツのグリーン・ツーリズム、社会スポーツ・リクリエーション論の日本における権威者である。本論文はバイエルン州を事例としてグリーン・ツーリズムのあり方を明らかにし、わが国におけるそれが定着しないことに、貴重な提言を行っている。日本におけるグリーン・ツーリズム研究者に必見の論文である。

論文正本は研究室と本学附属図書館に備えられているので、御利用をお願いし、御叱正をお願いしたい。

私の目から見れば、優秀な論文ばかりで、なかには、世界的な研究に寄与している成果もある。いずれも、地域に根ざし、現場主義を貫くという地理学研究の本道を行くものである。論文作成者は、この論文を基礎に、多くの教えと批判を受けながら、さらに精進していただきたい。